イギリス科ニューズレター

July 2021　29号

東京大学教養学部教養学科地域文化研究分科イギリス研究コース
大学院総合文化研究科地域文化研究専攻小地域イギリス
〒153-8902 東京都目黒区駒場 3-8-1
(8 号館 402 号室) TEL 03-5454-6304 (直通)
Email: british[at mark]ask.c.u-tokyo.ac.jp
Web: http://british-section.c.u-tokyo.ac.jp

主任挨拶

後藤　春美

昨年のニューズレターでもCOVID-19にふれましたが、今年度Sセメスターも、東京の感染状況は科学的根拠に基づいて安心安全と言える状態には至らず、イギリス科の授業もオンラインが続きました。駒場のオンラインのレベルは高く、授業自体にはそれ程の支障はないようにも感じます。また、事務的会議などはオンラインの方が良いと感じている教員も多いかも知れません。

しかし、授業の前後の雑談や、コモンルームで共に過ごす時間は、やはりかけがえがありません。お互いの人柄を知る上では、直接会って話をすることに勝るものはないでしょう。さらに、4年生の卒業論文や大学院生の論文執筆のためには資料集めが第一歩ですが、オンラインだけでは大きな制約があります。

確保の遅れが報道されたワクチン接種も何とか進んではいるようです。希望者には広く接種が行われ、安心してキャンパスを自由に活用できる時が一日も早く戻ることを祈らずにはいられません。

追悼　アントニー・スウェイト [OBE; FRSL] (1930.6.23 - 2021.4.22)

山内 久明（イギリス科6回）

The poet Anthony Thwaite, who has died aged 90, was a literary mover and shaker in postwar British literary life. He was in turn literary editor of the *Listener* and the *New Statesman*, and co-editor of *Encounter*. He worked as a producer at the BBC, and was a prolific author, reviewer and lecturer, travelling across the world for the British Council. Thwaite chaired the Booker prize panel in 1986, ...

これは2021年4月23日付、*The Guardian*紙の追悼記事の冒頭である。寄稿者はEric Homberger。

イギリス科初代の「専任外国人教師」――それがアントニー・スウェイトであった。オクスフォード大学（Christ Church）卒業直後、新婚の妻アンを伴い、1955年10月来日着任、57年7月退任帰国。教養学科4・5・6・7回生が教わる恩恵に浴した。日英の大学の制度的差違について知る暇もなく、自身が学んだオクスフォードを念頭に、新進の詩人としての気概をこめて職務に全力を傾注した。授業の一つがイギリス現代詩概観で、これは*Essays on Contemporary English Poetry: Hopkins to the Present Day*として、帰国前の1957年5月に*Poems*と同時に、研究社から刊行された（改訂Heinemann 1959）。後に哲学者として世界に名を成す石黒ひで氏（フランス科4回、当時8学期生）が、母語と変わらぬ英語で教室を盛り上げた。スウェイトの英詩朗読は、イギリスの名優に劣らず美しかった。粕谷哲夫をはじめとするイギリス科学生、川田順造氏など他学科の学生とともに、筆者は4学期から7学期まで教わり、出淵博、海老根宏などイギリス文学を専攻する同志の一人として、限りなく豊かな糧を得た。

スウェイトは兼任として文学部にも出講した。英文科学生に混じって仏文の大江健三郎の姿も見られた。25歳の青年詩人が大学院で教える機会はなかったが、気鋭の旧・新の院生や助手など同世代の有志と交流の場を持った。スウェイトが熱っぽく私に言った言葉が今も耳に響く――‘They are the rising generation of English Studies in Japan: Takami, Hashiguchi, Takahashi, ...’高見幸郎、橋口稔、高橋康也などの方々との出会いは終生にわたる交友として実った。国際交流基金フェローとしての滞在（1985-86）をはじめ、スウェイトの日本再訪は10回を超え、日英の絆を強めた。

オクスフォード在学中に学生詩人として活躍したスウェイトは、先行する‘Movement’の代表的詩人Philip Larkin (1920-1985)の影響下で詩を書き始めた。後にラーキンの『全詩集』、散文集、書簡集を編纂し、著作権管財人も務めるほど二人は近しいが、詩作においてスウェイトはラーキンから自立し独自のスタイルを確立した。大学入学前、兵役に服したリビアで見た巨大ローマ遺跡が、幼少期以来の考古学的関心を燃え立たせた。自称「素人考古学者」のスウェイトにとって、過去に光を当て現在に蘇生させる考古学的探求は、時間と非時間が交錯する中で言葉を掘り当て紡ぎ出す詩作と等価である。主題もスタイルも多様なスウェイトの詩の多くは、日常を素材としながら、鮮明なイメージと明晰な言葉を通して、心に迫る真実を啓示する。「内向き」でイギリスに籠るラーキンに対して、スウェイトの行動半径は欧米から中東、極東を含む全世界に及ぶ。編集者・寄稿者として文芸批評界の中心近くにいたスウェイトは、自国文学の論評に加えて、日本文学・文化の紹介にも尽くした。*The Penguin Book of Japanese Verse* (1964; 1998)は日本学者Geoffrey Bownasと詩人スウェイトのコラボレーションの賜物である。夫人のAnn Thwaite（1932- ）は高名な伝記作家で、F. H. Burnett, Edmund Gosse, Emily Tennyson, Philip Gosse, A. A. Milneなど浩瀚な伝記の著者として知られる。

スウェイトの個別詩集は20冊を超える。日本にスウェイトを紹介するささやかな試みとして、詩380篇を収める*Collected Poems* (2007) から36篇、47篇を収める*Going Out* (2015)から14篇を選んだ『アントニー・スウェイト対訳詩選集』（松柏社 2019）がある。

札幌より～イギリス科の思い出と最近の関心

浜井祐三子(イギリス科40回)

私とイギリス科とのかかわりが一体どれほどの長さになるか、改めて考えてみた。内定生になったのは1989年秋で、その後の院生時代、助手時代と、たまに就職や留学で中断を挟みつつ、イギリス科との縁は長く続いた。2000年に北大に赴任してからも、まるで遠く離れた実家のような気持ちで親しみを感じている。

かつての８号館の３階にあったイギリス科の研究室の様子は今でも瞼に鮮やかに浮かぶ。初めて訪れたのは89年の春で、進学希望を出す前に研究室訪問をした時だったと思う。その時対応してくださったのは山内久明先生で、本郷の西洋史か英文学かで進学先を迷っていた私に、ここならどちらも学べますよ、とその魅力を熱心に説いてくださったのを覚えている。

学生になってからは、同級生たちと毎日のように通った。私の学年は10人も学生がいたので、よく言えば活発、悪く言えば騒々しかったと思う。居心地が良すぎたせいか、学部を卒業し一旦就職したものの、2年で舞い戻ってしまった。その時、指導教員の木畑洋一先生、主任の成田篤彦先生を始め、先生方に温かく迎えていただいたからこそ、今も研究者の端くれでいられるのだと感謝している。

1999年には助手となった。当時の主任は塚本明子先生で、その快活なお人柄を映したような雰囲気であった。朝、研究室に出勤すると、向かいのお部屋から木畑先生、草光俊雄先生が様子を見にきてくださる。草光先生が調達してくださる香りのよい珈琲豆をミルで引き、朝の一杯を味わいながら先生方とお話しした時間がこの頃のよい思い出だ。

さて、そんな私が細々と研究を続けているのが、イギリスの入移民の歴史である。今でこそ授業で唐突に「イギリスは多文化社会で」と発言しても学生も驚かなくなったが、「移民社会」というイメージの強い北米やオーストラリア・NZなどと異なり、研究テーマを告げると「なぜイギリスで移民？」と言われることが以前はよくあった。私がこのテーマに行き着いたのにはいくつか理由があるが、イギリス科で歴史や文学、そして現代文化など幅広く学べたことが一つの端緒であることは間違いない。

私が主に関心を持ってきたのは、かつての帝国植民地から第二次世界大戦後にやってきた人たちとその子孫であるが、実はイギリスは歴史を通じて、外から移り住む人の流れによって国のかたちが作られてきた。かのダニエル・デフォーがイングランド人を「雑種、混血の民族（a mongrel, half-bred race）」と呼んだことはよく知られている。だが、カリブ海諸島出身の作家、キャリル・フィリップスが指摘するように、未だにこの「混血であること」は十分受け入れられていないのではなかろうか。イギリスは「鏡を覗き込み、幸いなる多様性とそれに付随する苦しみを作り出してきた歴史の満ち引きを受け入れる方法を見出そうと」模索し続けている（2000年*Guardian*の記事での発言より）。

ということもあって、ここ最近、私が興味を持っているのは、そんなイギリス社会の移民に関する「記憶」の問題である。その一環として、2016年にイギリス移民史の代表的研究者であるパニコス・パナイーの著書（『近現代イギリス移民の歴史～寛容と排除に揺れた200年』人文書院）を共訳・出版した。実はその前年に集中講義を駒場で担当する機会をいただき、授業の中で本書を駒場の後輩たちと講読したのもよい思い出だ。（８号館はとうに建て替わり、かつての研究室ではなかったが、変わらず賑やかに研究室でおしゃべりをする学生たちと共に学べたことは実に有難い機会となった。）

翻訳書出版の年、ちょうど半年の研究専念期間をいただいていた私はロンドンでブレグジットの国民投票に沸くメディアを目の当たりにした。一部の大衆紙が「移民」「難民」の存在をヨーロッパ連合にとどまることの「弊害」として喧しく書き立てているのに、なんとも複雑な気持ちにもなったりもした。

だが、悲観的になるニュースばかりでもない。例えば、ロンドンに民間プロジェクトとして設置されている移民博物館（Migration Museum）https://www.migrationmuseum.org は、そんな過去と現在、かつての記憶と現代の移民への認識を取り結ぶ貴重な場所となっている。私がこの研究を始めて30年が経った。あともう少し、研究者としてイギリス社会の変化を見つめていたいと思う。

写真は、多文化都市レスターのヒンドゥー寺院。このような寺院には、使われなくなったキリスト教会の建物が再利用されていることも多い。

マイケル・オニール先生との思い出

五十嵐奈央

私は、2012年にイギリス科に修士課程から入学し、その後、2015年10月から2019年9月までの約4年間、イギリス・ダラム大学に博士課程の学生として留学していた。今回は、留学先の指導教官だった、マイケル・オニール先生との思い出について書いていきたい。

ダラム大学への入学を希望したのは、オニール先生の元で詩を学びたいと考えたからだった。ロマン派の大家である先生の著書を初めて読んだのは、修士1年目、シェリーの詩についてレポートを書いた時だった。レポートの出来は別として、「こういう風に詩が読めたらいいな」と思った記憶がある。そして、ルイ・マクニースの詩について修士論文を書くことにしてから、オニール先生がマクニースを含む1930年代の詩人たちに関する著書も共著で出していることを知った。読んでみると、先行研究を読んでいくうちに迷走し始めていた自分に、論じたいのはあくまでもマクニースの「詩」のことだと思い出させてくれるような内容で、うなずきながら読んだ（かどうかは覚えていないが、色々な意味で「納得」したことは覚えている）。無事に指導学生として受け入れていただき、ダラム大学での留学生活が始まってからのオニール先生との面談は、毎回学ぶことばかりだった。最初、何をしていけばいいかよく分からなかったこともあり、と

りあえずマクニースのソネットに関するエッセイを持参したところ、「（精読が）全然足りない」と言われた。手を抜いたつもりはなかったが、細かい解釈よりは全体的な論点を確認するのだろうと、何となく体裁のついた文章を用意していったのだった。そういうことではないのか、と、その次からは詩を1行1行論じた（そのため一つの文章としてのまとまりは一切ない）ものを提出したら、「これでいいんだよ」と言われた。あとから他の学生に聞いたら、もっと整った文章を毎回出している人もいたので、まとめられない自分の能力の限界を思い知ったが、とにかくその1行1行の解釈に対して先生が読みながらしていくコメントを私が必死でメモする形式で面談は行われた。それらのコメントが、私からは一生生まれそうにない視点や解釈、表現で非常に勉強になったのはもちろん、同じ詩を一緒に読み、一つ一つの言葉、行、韻について話している時間が、単純にとても楽しかった。オニール先生の詩の読み方には、自分の論じる（愛する）詩が素晴らしいことを信じ切っている、それを前提としているようなところがあった。私が、あるマクニースの詩について否定的な批評を読んだという話をした際、‘Nonsense!’と叫び、論文の中で反論しようと提案してきたこともある。私も、詩や詩人への愛を前提とする研究態度は真似して持ち続けていこうと思っている。

オニール先生は、私の博士課程最後の年、2018年12月21日に逝去された。いまだに泣かずに思い出すことができない多くの記憶があり、無事に博士論文を提出し、博士号を取得出来た今でも、「オニール先生と一緒に博士論文を出したかった」という思いがある。この思いは、単に残念だ、とか、悲しい、とか、引き継いで指導してくださった先生に対しての何か、というものでは全くない。とにかく、オニール先生の学生として博士論文を提出したかった。それでも、先生とマクニースの詩を読み、博士論文を書くことができたダラム大学での留学生活は、色々（本当に色々）あったが、幸せだった。

未熟ながらも大学で教員として働き始めた今、心が折れそうになる時にもオニール先生の言葉を思い出すことがある。留学最後の年、学部生の授業のチューターに応募した私は、形ばかりの面接に、指導計画を持参した。読む作品が決まっているので、結局全く必要のないものだったのだが（それを確認していない時点で先が思いやられたのだが）、それを見たオニール先生は‘You’ll be a good teacher, Nao.’とニコニコしながら言ってくださった。常に前向きな言葉をかけてくださった先生の、何気ない一言にすぎないこの言葉を、教員としての自分を進み続けさせるための励ましとして日々言い聞かせて、何とか頑張っている。今は「頑張っている」という中途半端な言葉を書くことしかできないし、先生のように、この文章を締め括るのにふさわしい詩の一節を引用することもできない。けれども、天国で他の詩人たちとのおしゃべりに夢中であろうオニール先生に、研究者として、教員として、やってきたことを胸を張って報告できる、少なくともそう思える日が来るようにしたい。

Durhamで開催された光の祭典

*Lumiere*の展示物の一つ

将棋アマチュア日本選手権優勝記
イギリス科３年　横川天紘

初めまして。イギリス科3年の横川天紘と申します。今回寄稿させていただくのは、自分の所属する将棋部の活躍についてです。また、イギリス科に進学内定してから半年以上授業を受けてきた感想もお伝えできればと思います。

2021年3月27日、株式会社リコーの本社で開かれたアマチュア将棋日本選手権に東大将棋部のメンバーとして出場し、優勝することが出来ました。日本選手権は大学生王者チームと社会人王者チームが競う団体戦で、優勝チームは名実ともにアマトップチームとなります。東大将棋部は2020年度の大学王者で、対する社会人王者は日本選手権3連覇中だったリコー。さらにコロナの影響で開催できなかった昨年度の大学王者の早稲田大学も加え、今年度は異例の三つ巴の決戦となりました。基本的に、将棋の団体戦では7人対7人の勝負で4勝したチームが勝利です。
個々人の実力はもちろんのこと、選手の並び順（オーダー）が鍵になります。相手のオーダーを予想しながら、大将席にエースを持ってくるのか、あるいは後ろに回すのかなど考えるのが醍醐味の一つです。

スケジュールは、1回戦で東大vs早大、2回戦に1回戦の敗者vsリコー、3回戦に1回戦の勝者vsリコーという流れでした。初戦の早大戦は相手チームの大エースとの対戦。知り合いだったので手の内は大体分かっていましたが、いかんせん相当の実力者なので厳しい勝負になるかなという感じでした。内容としては中盤くらいまで有利に進めたものの、終盤にかけて上手くまとめられずあえなく敗戦といった展開で、かなり悔しかったです。終局後、チームメイトにスコアを聞いたところ6-1で勝利との返答。ん？これ負けたのは僕だけじゃないか…。ライバルである早大にこのスコアは凄いですし嬉しいですが、自分は勝っていないので複雑な気持ちでした。2回戦は早大vsリコーの一戦、オーダー的にも下馬評からもリコーが圧倒するかと思われましたが、早大の大健闘で一時は早大が勝利目前でした。最終的にはリコーが底力を見せ、4-3のスコアでリコーの勝ちとなりました。

こうして優勝チームは東大とリコーの一騎打ちで決まることになりました。リコーのメンバーは本当に強い人ばかりですが、早稲田を6-1のハイスコアで下した我々東大チームに風が吹いているとお互い鼓舞しあいました。初戦と同様私は四将として出場予定で、事前のオーダー予想では相手のエースが第一候補でした。ただ、彼はアマチュアトップクラスで、プロ編入試験を目指している程だったのでむしろ気楽な心持ち

ではありました。しかし、リコーがオーダーを大きく変えたことで相手は別の方となり、オーダー的に私の勝利がチームの勝利の必須条件とも言える状況に変化し、俄然プレッシャーがかかる展開となりました。ただ、先ほどは負けているので今度こそ勝ってチームに貢献してやる！との強い気持ちで臨みました。

気合十分の私の先手番で始まった対局は、千日手となりました。千日手とは同じ局面が4回以上連続すると成立する引き分けのことで、両者ともに動く手段が見つからなかった時に生じます。大会の規定により、千日手の場合は手番を入れ替えて指し直しとなりますので、私は後手番で指し直し局に臨みました。戦型は相手の矢倉（藤井聡太二冠の得意戦法です）に対して、私は雁木という近年ソフト（AI）の影響で見直されている形を採用しました。アマチュアでもAIを用いた研究は盛んで、この対局でも事前に私がAIを用いて研究していたものと類似した進行となりました。以降有利に進めることができ、危ない瞬間もありましたが勝ち切ることが出来ました。アマタイトル経験者がひしめくリコー将棋部の中でレギュラーを勝ち取っているアマ上位層の方にいい内容で勝てたのは自信になりました。実はこの対戦相手の方は東大OBということで、対局後少しお話が出来て楽しかったです。

この最終戦は、東大は5-2というスコアでリコーに勝利という結果に。私が当たると事前に予想していたアマ最強の相手に前主将が勝利していた（！）ことでこの結果に繋がりました。終わってみれば早稲田大に6-1、リコーに5-2と東大の大勝利で堂々優勝を飾りました。皆心強いメンバーで、安心して目の前の対局に集中できたのが良かったです。日ごろの努力の成果をしっかり発揮できたと思います。また、自分を出場メンバーに選んでくれた主将に感謝しています。さらに、コロナ禍でも開催に尽力してくださった主催のリコー様や将棋連盟の方々にも感謝しております。この場を借りて御礼申し上げます。

最後に、イギリス科に入って私が今何をしているのか、どういった現状なのか、イギリス科についてどう思ったかを書いていきたいと思います。進学選択の説明会でも感じたのですが、イギリス科は非常にアットホームな雰囲気で先生と学生の距離が近いと思います。実は、私がこの寄稿をさせて頂いたきっかけは中尾先生が私にお祝いのメールをくださったことなのです。東大の優勝を載せた新聞記事に私の名前があると気付かれたようで、連絡を受けて恥ずかしいやら嬉しいやらという気持ちでした。何より、学生の名前を覚えて頂けていることに感動しました。なにぶん中尾先生の英詩読解の授業ではついていくのに精一杯でしたから、逆に出来の悪さで覚えられていたのではなんて悪い想像が浮かびましたが（笑）、優しさゆえと思っております。また、大学の全国大会で授業を休む旨を小川先生にお伝えしたところ、嫌な顔をせずに対応して頂きました。先生方の心温かな対応は非常に嬉しいですし、課題が多い中で踏ん張れる理由でもあります。

基本的に講義はzoomを用いてオンラインで行われていますが、少人数の講義が多く実質ゼミ形式となり、指名される機会も多いので気が抜けません。自分でレジュメを作って発表という輪読形式の講義も多いです。例えば西川先生の授業では、スコットランドにおける名誉革命の文献を読んで発表を行いました。内容が難しく、英語と日本語の文献を漁りまくった分理解が深まり、卒論のテーマにしようかなとまで考えています。英語のみの授業もいくつかあり、現在受けている中だとAdvanced ALESAが最もハードです。毎週文献を読みディスカッションする形ですが、周りのレベルの高さに驚きます。ただ少しずつ上達している実感があり、楽しいです。どの講義においても英語の一次資料に当たる機会が多く、自分がこれまで得てきた知識をさらに深められるところもいいですね。講義の一環でマーシャルプラン演説の原稿を講読したときに感動した覚えがあります。

イギリス科に入ってからこれまでになく勉強に追われている気がしますが、充実の表れでもあります。追われるのではなく、もっと主体的に探究できるようになりたいですが、まだまだです。これからも多くのことを楽しみながら吸収していけたらと思います。

記念写真　右端に座っているのが私

第20回ホームカミングデイについて

今年10月16日（土）に開催予定ですが、どのような形態で実施するのが望ましいか、現在検討中です。下記のホームページで最新の情報を発信しています。申し訳ありませんがコモンルームの開室は致しません。どうぞよろしくお願い致します。
https://www.u-tokyo.ac.jp/adm/hcd/

卒業生の方へお願い

イギリス科ニューズレターは紙媒体と電子媒体の 2 種類の方法で皆様のお手元にお届けしております。今回、紙媒体にてお送りした方で、電子化にご協力いただける方は、下記の卒業生専用アドレス
igirisuka[at mark]ask.c.u-tokyo.ac.jp
まで、送付先アドレスのご連絡をお願い致します。また、ご連絡先（住所・ 電話番号・メールアドレス等）に変更がおありの場合も、上記までご連絡をお願い致します。

ニューズレターに関しましては、経費節減と環境への配慮から電子化を進めておりますが、同窓会の案内など郵送が必要な時もございます。

同窓生の皆様に引き続きご支援をご検討いただけますと幸いです。

ご賛助いただけます場合は、下記口座までお振込みいただけますよう、お願い申し上げます。

ゆうちょ銀行
名義：イギリスカ
口座番号：10090-2-43621671

ゆうちょ銀行以外からお振込みの場合、口座番号が異なります。

銀行名：ゆうちょ銀行
支店名：〇〇八店（ゼロゼロハチ）
口座種別：普通
口座番号：4362167

2021年度 イギリス科運営委員
後藤春美（主任）、西川杉子（副主任）、小川浩之（広報）、中尾まさみ、アルヴィ宮本なほ子、八代憲彦（教務補佐）、清水領（教務補佐）